

研究分野のキーワード：文語文法、口語文法、推量の助動詞、文法教育

研究紹介

国語教育において文法を学習しますが、その意義はどんなところにあるのでしょうか。

高等学校では文語文法を学習します。文語文法は古典を解釈するための文法で、文語文法を理解していないと精確な古典の解釈はできません。

古典を解釈する上で重要な品詞は助詞・助動詞で、古来「てにをは」と呼び特別視してきました。助動詞のなかでもとりわけ複雑なのは、推量の助動詞で、「む」「むず」「らむ」「けむ」「べし」「まし」「らし」「めり」と8種類もあります。これを暗記しようとする、かなり苦勞し古典嫌いをますます助長します。これらの助動詞は脈絡もなく漫然と並んでいるわけではなく、何らかの理由があって存在しています。例えば、「けむ」「らむ」「む」は「過去」・「現在」・「未来」という時制で分類できます。すなわち、「けむ」が「過去推量」で「～ただろう」、「らむ」が「現在推量」で「～ているだろう」、「む」が「(未来)推量」で「～だろう」です。単なる「推量」は、これから先のことなので「未来」ということになります。

口語文法は中学校で学習しますが、その意義はどこにあるのでしょうか。例えば、①「良くはなさそうだ。」、②「そのことを知らなさそうだ。」ではどちらが正しい日本語でしょうか。どちらも「なさそうだ」ですが、一方は誤用です。答えは①が正しく、②は誤りです。正誤を判定するには、様態の助動詞「そうだ」は形容詞の語幹（ただし形容詞「ない」「よい」は「語幹+さ）、助動詞「ない」の活用しない部分に接続するということを理解する必要があります。加えて「ない」が形容詞か助動詞かの判別も重要です。文法学習の意義は、正しい日本語を話したり、書いたりするということにあります。

口語文法で、推量の助動詞として「う」を学習します。教科書の例文として「風も吹こう。」があります。話し言葉では、方言は別としてこのような言い方はしません。「風も吹くだらう。」もしくは「風も吹くでしょう。」です。話し言葉の推量表現は「だらう」であって、口語文法の「だらう」（断定+推量）の捉え方自体に問題があります。中学生は実用性のないことを覚えなければならなくなり、文法学習の意義に疑問を感じるかもしれません。それでは、「風も吹こう。」を文語ではどのように表現するのでしょうか。答えは「風も吹かむ。」です。口語の「う」は文語では先にみた「む」に対応します。ですから「風も吹かむ。」→「風も吹かう。」→「風も吹こう。」となるわけで、口語文法は文語文法の枠組みの中に組み込まれていることがお分かりでしょう。口語文法ではこのような項目がほかにもあります。口語文法は文語文法を基にしているため、現代日本語の実態に即したものと言えない面もあります。この点で、日本語教育で扱う文法とは相違しています。口語文法を真に理解するためには文語文法の知識が必要です。口語文法を学習するのは、高等学校で文語文法を学ぶためでもあり、換言すれば古典学習のためでもあるといえます。中学校での文法教育においては、このような意義も十分に説明する必要があります。